WA7
(3)
237

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-001
国立国会図書館

00w90930

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-002

国立国会図書館

帝鑑圖説巻第三目録

郤千里馬　漢の文帝
止輦受言　漢の文帝
納諫賜金　漢の文帝
不用利口　漢の文帝
露臺惜費　漢の文帝
遣倖謝相　漢の文帝
歷尊勞將　漢の文帝
蒲輪徵賢　漢の武帝
明辯詐書　漢の昭帝

昭和廿五年八月四日
山口誠太郎氏寄贈

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-003
国立国会図書館

褒賞守令　漢の宣帝
詔儒講経　漢乃宣帝

帝鑑圖説巻第三

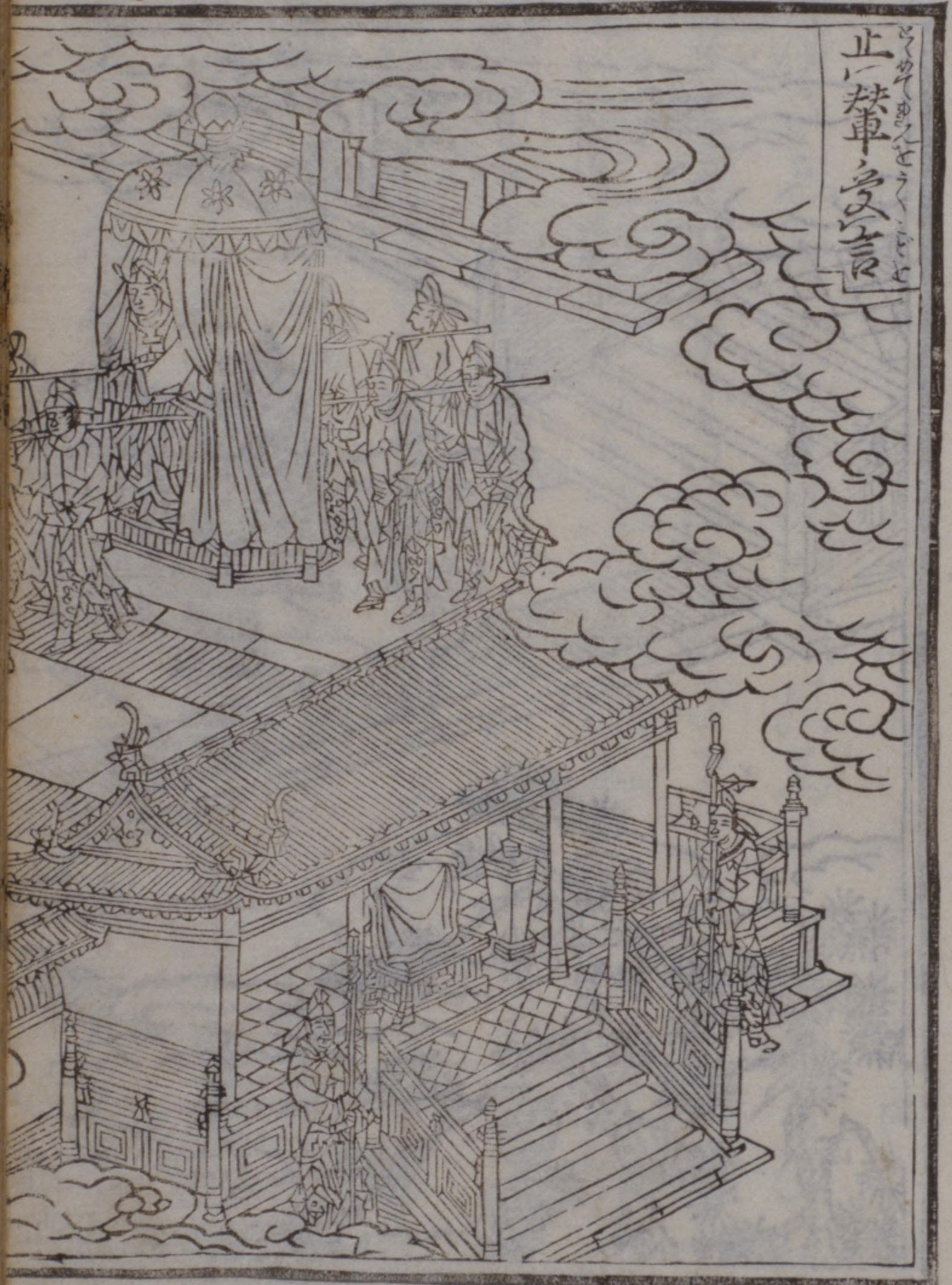
郤千里馬

漢の文帝とまうして一人の御門あり御かにある人一日
に千里をとぶ御馬をひいて御門へもてまいりければ
に文帝御覧じて仰せけるは我は行幸ぎやうがう
せしかども車はしらんのもとをはけまん（へおもむくには
さいせうしろまハあまたれどもをつれりて出御
ときだにも一日にまづ五十里をもすぎけりなり
あるひもあんでまありていくさまに門などいくさ
一日にうちうちハ三十里あてもまたぞいわれ千里乃
るまめりとれをの御むさきさてひやりされへ

ゝまゝみゆるぞりうなんの見なしとてまゐらせ
馬をうへし給ひけるにかのるをすゝめしかの思ひの
かりれちよくめいありてむかしをひいそうなりけり
故ことに千里の馬も良馬ありや天子ゆくとも文帝
おほしめすなりいされ天子のりちいださるゝあらぞ
とてたちまち馬をかへされいちんや金銀珠玉
のたからよりあまたおやなどうえこのゝ給ふ所
と造そいかしへもいつくより見けるをそこなそされ
たゞ其こゝろざしをもちゐりぬせん見るのをかのとび
ざれたまう乃心まんそくをといひしをあれ文帝の
うへ給ふ小まぎざりし

一 止輦受言

漢乃文帝よくみちをおさめとくをあきらかにして
まつりごとをおこなひ給ふ事常にいさめをきゝいれ
給ふそのかみいやしきものまでもいさめをなされけり又郎官以下
乃ものまでも書をたてまつりて君をいさむるその
あまたのみちのなかの役人ふみをもたらしくる度ことにとゞめ
て使者にあひいくたびもいさめをきこしめされけり車をとゞめ
いさむることばづかひにかなはずとも見すて
事乃可否をわきまへてきゝいれ給ひし事をも用ゐ
これそのいさむる所もいさめをとりあげいさむるに
悦びあるいはあらはれてほめたまひけれはおほん



止輦受言

されば人君の徳はいさめをきくよりさかんなるはなし
しかれば秦の始皇の時は人ともにものいはずして
そのいふことをきくきんぜい甚だおもかりけり
天下の人そのいふ事をゆるさずして君をいさむる
人なかりければほどなく天下ほろびたりけりしかるに文帝は
我があしき所をきかんとおぼして人のいさめをこのみたま
ふむかし舜王もよろこぶ事あまりにきく事
をとし又湯王は人のいさめをきくことをしたがひてみちを
おこなひ給ひたりいまこの文帝もいかでかおとるまじ
給ふべし

納諫賜金

漢の文帝と申てみかど一人御しますがある時霸陵
と申ところより御くだりあそばされて西のかたへ
みゆきなされ給ふおりふしに六れ馬まろうぬをひかせて
いつまもけはしき坂をそゞぎより車をはやめさせ
給ひしかどもあるに袁盎将軍とて一人の臣下あり
この馬はりにかゝるまにそひたてまつりてみゆ
きの御ともにさふらひしが御車をおさへてとゞめて
られ給ふにいりてあやうくおもひかんあせて
さのへもかくれて御車をの死ものぐむ文帝仰られけるは
御説ぢて此御心ろもかくそれ将軍ありのたはむ

きうにいさゝかもはゞかる所なくしてげんりを
あれらのまなんじいりてかおそれおろぞや袁盎(ゑんあう)
せんじとうけ音まりりもありちやしろうハ作せもし
さみてゆへども近侍のくらゐまゐりしお
聖明(せいめい)乃君として天下乃あるじたる人もおくみあや
うき所をば車馬(くるま)りみうせたまはゞそのみをおもう
ちくりなくしくもちたまふを後志うのまよいはし銭が
君も六れるにはくろ波をひの後さうにさうをそゞ
ら後縁へりきでらくとくまり縁ふ為しをしるなど
後きそ清車為ぶ連ふ早よ小太事いぞでき明どもう
らもいせさ猶たまふともいりでそのうれあらめや

さあれど紀ん二人の父母(ふぼ)は何とげき何となぐさあ
給ふ為し文帝(ぶんてい)もこのよしきこしめし運をいさむる
やうあとりり有りと地当り来りはくろ波をかゞめ
給ひてこゝゆさを座あさう勝をひかりを後又袁盎(ゑんあう)君乃
はともや事上林園(じやうりんゑん)よ侍(えつ)りしもくに文帝(ぶんてい)は思ひ人
慎夫人(しんふじん)は中にあり禁門(きんもん)てうあひあさうそど救(きう)り
齋(ざい)一乃はさ后妃とあるし座(ざ)きにあやらさ後へで
袁盎(ゑんあう)はより見ろよりもこんぶまいありて淑嬢の難
はきされと同坐(どうざ)にありて婦給ふ事いを連なしとて
袁盎もく見いで慎夫人(しんふじん)をの紀ありぞけて下座へ
ゆづりしめてまゐり文帝(ぶんてい)このよしはぢらんじておぼし

歎されけるハさきこそわがあやまりなれ袁盎ハよく
あれこそ忠諫なれ理をせめて申すにこれハ
いさめまうすとハよろこびましくてかたじけなく
も袁盎にこがね五十斤をくだされけり其人乃陛下
としてきゝにあやまりあるをなすらバいさめを申して
うくるを悦しさてこそ人乃君とし申さんものいさめよ
きらがひてちうきんれともがらりもなくかん
きやうをかくしこゝを申しちうげん見てにさうひぬ事
だ二たびいさむる陛下も申し悔ことも天下の君たる
人ハ文帝乃ぎやうをかゞみとすべきことなりとかや

不用利口

漢の文帝ある日のことなるに上林苑にみゆきな
されて虎圏のけだものをかひてとりをさむるものゝくぶ
ぎやうにおほく禽獣の簿籍の官を召されて此苑の
中にすむところのけだものいかほどあるぞと
尋ねあそばしけれども簿籍の官返事をせず事ある
ときにその小嗇夫そのかはりにくはしくこたへみ
いで簿籍のこと申しあげて一々御返事申しければ
文帝はよろこびましくて張釈之にのたまはく嗇
夫の者嗇夫は先林ありてものをよくいふ者なり
かれをよりて嗇夫をもて上林苑のぶぎやうに

かさんとありしかども釈之すゝみていはく絳侯
周勃張相如この二人は徳ある賢人にてものいはず
せずしよく禁中にまゐりてハ天下の政をとりおこなふ
にもくちをひらいてかざりいはずかくのごとくの人を
どもそのまゝにあてゝおかるゝゆへに徳ある人を
あつかふのほうありふうふしてそぞろにこのたぐい
えぞいはぬこの嗇夫もよくあんぜつをもつてその政
いふ事をみ給ふあり君をし嗇夫ばかりにて官に
あげさせ給ひなば天下ぜんうんをしなべてこれを
くちとあんぜつをまなびそのいはゆるをもうるはしく
とりかりをとりてまことをうしなふにいたらんことを

いはゞいかゞあるべきとてかく嗇夫をとりたてたまはし
せらるゝはおもひとまりたまふぞ文帝きこしめされて
張釈之がいふところ理なりとおぼしめし
は嗇夫をとりたてさせたまはずそれより事をみるに
つけても人のいはんことにみだりにあんぜつを
きかさるやうにとのおもんずるをよしとぞおぼしめされ
まふとぞ文帝は釈之がいさめありしを
かひなき事なりとおもひけるこそふかくえんなれ

不用利口

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-013
国立国会図書館

露臺惜費

漢の文帝ある時驪山といふところに露臺をつく
らんとおぼしめしてまづ番匠をめしよせ物のいひて
あかり候ふみつもりいたしまれ番匠はいくらんとに是
金銀のつひゆる所いかほどぞとみてあるらんとうかゞひ
や所とおぼしめしかぞへうけ給はるとてくはしく申
ちうりかんがふ御よ黄金百斤の法ほどえかりし也よし
かくと申あげければ文帝きこしめされて仰せ
あるはそれ黄金百斤を民の家にかんがふれば中人
十家のたからとおなじぬあくをもつくあんとおもひ
いたされ一つの臺をたてゝむかしも十家のいと

あふなを成ぶらん事はことよりおしむなきところ
なりし先帝乃宮殿をはぶらけてけうにせましと
よろにあらぞ無このたからと津井成してうてなは
作りて白兒おしとて思ひやぐまりあひろりそれ
文帝も天下四海を太平におさめ金銀ざいほうに
やましうるぞありといゑともむかしく氣ありを
つ升成したりいぞむかし堯舜乃とき土階三尺乃
を宮ゐるをちてさまひしもいうでうあれ小さとなりん
又秦乃始皇阿房宮をたて宋の徽宗乃艮嶽をたてゝ
きん銀をちらやして千万人乃いとなみをばらぶり
だんらん乃もとゐをうぞひとりてひやうり宗社

さりへ後々子孫はばんらんりんをとり也へう孫で
たうぞくおこりく世みだれて津あまよ天下おさまらざる
宮殿をならべたるにいかなるいゑどもいまでうたのし
みをとげさうんやそれ天下乃主ごとゝる人は文帝乃
むかしを手川なふうじ見とるべき事とうや

帝鑑図説 8冊 WA7-237 03-015
国立国会図書館

露臺惜費

帝鑑図説 8冊 WA7-237 03-016

国立国会図書館

遣倖謝相

漢の文帝の御時に申屠嘉といふ人のありけるが公
なるをふし事よくものくるはしき事をまもる故に文帝
かれを抜おもんじ給ひけり丞相のくらゐにあげ
給へり又郎官のうちに鄧通といふものありさい
いひて文帝の御てうあひとうく事よによならべも
なかりけりある時申屠嘉文帝の御まへにまいりしを
御かたに鄧通文帝の御そば近く侍りしが礼儀みだりなり
御てうあひ御しまをかへりみず御ことにはゞかる心もなく
そのふるまひ無礼なり申屠嘉此体をみてより
まかりいでゝ後やしきにかへりて表をもつて

てうあひまし漸さだまらざいちうをあらそへりゆへ
みせさうけうにめしそれ禁中にまいらせまいらせられても
よくけりしむりよくもかしかるずふまいを
いましめらへと申けるもあやしおふきよう為り
一つのふくをとうい為鄧通が所へはこいも甚ふこに
いかくなんじ為ぞいまだ我がとこ錢へきくるれども
きざしきどいもあちなんじとまろせ為り鄧通あの
あしをみるよりもみそかふかくどろきて此聖をくせ
文帝へそうもんも文帝さうし?されてかかせるか
ゆるされたりのこさい那しなんじが家ぶかあり
ほへ甚いましめれたあるかるかんじもみ為かに

さりて丞相りまみへしと私ゆひまろば鄧通もあ
ちち廷尉の家まいりかんむりをとりうけをぬぎ
延おれまへふひれふしうけ為を地うりはけて我の
あやまりれいもむきをはぶさたまびていひあるぞ
申屠嘉おそしよいりいてくくそれ朝廷をまいぎ
をけくしむところありなんじ小臣の身として
うらじけなくを殿上にゐてぶれいをするいそまし
むしろかならずなんじはあれやかくありつがそ
まさとらふまくに吏官にそのすやはけあれそる
らへとありあるぞ鄧通おそりてへり称てうり為を
うりてちばいぶしまかあやまりそさあまどもゆる

さ棟殺へのよびきれし申屠嘉はおふいかりを恩め
そのかりきかと殺まり文帝がりしめされたりて
鄧通までに申屠嘉が前まいりてまぶめくおかひに
いかられてならしむるさとおかりおりもおいちん
をはかりをされ懇おはよびさ秘殺ひて鄧通をめされ
しかば申屠嘉ちよくめいありされどもそて鄧通を
ゆるしたり鄧通はうぎうかりて文帝のもとへ
きたりしてなんだをながしてかたりて懇おもそに
我をころさんとせしる命ことまぬかれやうかりはかに
あれはおんによりて命くいのちをたまはりけり
申しきこえまりとりあれ

屈尊労将

漢の文帝のとき北方の匈奴むほんをおこしてこゝや
こへあるをなやましけるを文帝きこしめしおどろきたち
劉礼徐厲周亜夫けふ三人のものどもを将軍になされ
はくあまたのはんものをそへさ陣ふせの三人の
ね将軍殺方符のは色あれとのへくしてまでりこや
こをあちらいろあく劉礼も覇上といふ所にぢんをはり
徐厲も棘門にぢんとり亜夫も細柳といふところに
ぢんとりて敵をふせぎさてまた尚書文帝
おりしかもそれは三人のものどものきしをか
せんそう丸をはくしさゞめてもやはかりねたまふ

陣中へいでゝ見まはるべしとてみづから御馬にめ
させてまづ霸上棘門の二ヶ所へみゆきありさて
それよりもうちまはりて細柳へいらせ給はんとしけるに
きびしくまもれる其の営門までいたり給へばもんを
とぢて入まいらせずこゝにおいて先駆の天子御いでと
よばはりければもんをひらけといひけれど
軍門のものどもやくがそれ軍中にては将軍の仰せ
をこそうけ奉れ天子のせんじをうけたまはることなしと
といふことありて文帝いそぎ将軍へ使あり
きんせつをもたせて文帝のおほせを御諚じてすゝめたまひ
御みづから入らせ亜夫が所へ使ひをたてさせ

給ひ営門はまさにぐんちうを見まはりたまはんとこれ迄
きたりといへどもぐんもんきびしくとぢて入事
あらずと仰せられて亜夫がもとへおほせつかはされ
されどもなほまもりぬれば軍門をひらき天子をいれ
奉りて軍門のものともに天子の御まへにまいり
申てみゆきなりとも将軍のおほせにてゆるされ
まかりでずといひしがとぢてかけしをまもる
ゐるをいれじやうくとゆくへありゆくは今は
はやくもゆるしたまへと申けりさてそれよりも文
帝もやう〳〵軍中へいらせ給ふ所に亜夫天子に
いでむかへ名をあらためてまみえ奉りけり

甲冑をたいしてはものゝ鋒をとぎゆみをひきてやをはげ
たるを軍中のまへさきまでかはめんとすれども
中へ入ず文帝のおしときこしめしそれぐんちうの
まもりこそかくこそあらめと思召亜夫をほめて仰せ
まことにこれこそまことの将軍なりさきに覇上棘門の
いくさはれど軍門のだんしもゆるかせにして
油断にまもらんたれたなくもあれなりしにかりもし敵人
みたかふせあかけそいりてかふせぐ事むなし
よくの亜夫家にいりても敵入りあやまちせめらる
事かなふまじとたのもしうぞおもしれけるそれ亜夫ハ
一世の名将なりといへども文帝又聖明の

君にあらずハ亜夫よく我ちんゑいをかたうして
そのまもりをゆるかせにせずまもりとり行ふざいらを
なしぬりがたさやすく施行て見るとえて後世の
君たる人よく大将をえらむたぐさる事文帝を則とし
かゞみとすべし

風后奇方得

帝鑑図説 8冊 WA7-237 03-023
国立国会図書館

蒲輪徴賢

漢の武帝と申て御門一人儒者のみちを
あつく好給ひてその比天下に名ある儒者などを
めされてくわんにあげたまふ趙綰といひしものをば
御史大夫の官になされ又王臧をば郎中令の
官にもし給ふ此の趙綰王臧二人の人々君へ
そうもん申されけるはわれらが師しやうに
申公と申して一人の儒者ありがくもんよくまなび
御しうとをめされてくわんあげさせ給へとや
申されければ武帝そのよしきこしめしおりふし使者を
つかはされ申公をめされけるにその御よ武帝おかし

めとりハそれ申公を迎よりなかきのところくそれさ
ふそかなすらハみちのりハ遠といふなれしとて
一旗の事をひき換て申公を迎されたりけり
かのくるまの輪を蒲をもつて巻ていまだ換給ひて車の
うちをたひらかにしうちのゆうかえせしめけり又
第一の来に玉をそなへさせ給ひて申公まいらせられたり
申公君の御おんをかんじ奉り雄やこんへいうりせり
武帝なのめに思しめし申公を太中大夫の位に
なされ魯王の府裡にありし博士なりし武帝申公に
といひ給ふ天下を太平にせんといふ事いかにと
せんとありけれど申公申やうハ法をもて天下を

おさむるハたゞよく申なさき志さいむ君徳に
心をそゝげありて王業をおこなひたまハゞ太平のは
代なるべしとや申けるとありけるとぞいふの
おさまる事もみゆべき物なるを賢人にあひとりや賢人
されどてんかこゝろよく賢人をえて太平なり故に
いにしへの明君も賢人をもちゐてこそ天下を
ところえり漢のてんかはじまりてよりいにしへ聖
人の御代にもおよぶべくしいえども武帝にいたりて
ぶんぶんをこのみたまひ御事古人のきこえしおと
なりぞ故に天下太平なりしおさまる事申しさうらう
ありけりや

蒲輪徴賢

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-026
国立国会図書館

明辯詐書

漢の昭帝と申てみかど一人御しますが御年十四の
とし成りもくらゐにそなはり給ひしろしめし給へり
大将軍霍光と申てひとり乃臣下有り君ようせうに
御しませばよろづ天下のまつりごとをおこなひて
きこえもたかしさてその比燕王蓋長公主左将軍桀
おなじく其子安ならびに桑弘羊この四人ものく
霍光がいせいひとりほどこせるをそねみていかくしてそれ燕
王をもさうつぎやうまてましませども天子のくらゐ
をゆづりのせまりどあれりくつみありいかんな
らで昭帝をとりのけて燕王をくらゐにそなへたて

きりらんといふ様くひやうでうなりかだかり給ふに
だる将軍桀がされたりけんそれ昭帝いまだ十四歳
にてありし悔せずいつはりにもべきこともあれ悔こそ
ふやそうりぬものげそうまうしとどまらくに霍光はざん
げんしてやうかにおもとそのさうだなんれ忘さいの
あるべきぞけうばかりあさとをてゝたてんとて燕王
ぞりりて文をはくりて燕王よりもわが君へはつひ
の人まいりよりけふ御読ゐへとて昭帝へもてめ
奥てまゐりなるのふみにいそくうけたまはりれば霍光
を幕府の掾尉にてうせられてよろづ天下の事を
とりて殊ら勢くふはさ霍光かしひまくふいせひ

ふあざりてう色いてく人数族りよきとむかんとくるを
よりぶよしをはきへうけたまはるとぞうさにたり
昭帝このふみ読み読じて色きちおちまりしゆで続
給ひて二たび志をへたゞし今までも霍光はよしと
きくよりもこともいかなるあらんぬれなきやうがも
あり孫どもせひよりよをね潔撥かりこのうへ志旅
わしとかくはこの奥がわ候をまいるぞとてつ井
よきもいし読座あてうぶ座ふこうえいさまたり
きりおにかくじけなくも職門よりちよくしをさそ
霍光をめされたり霍光君の御まへにまうりして
ちやくしうかんもまゐそれかうべをかたむけ君れ

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-028
国立国会図書館

仰せなきまゝにかゝり昭帝の給ひけるは大将軍光がかん
むりをちやうしてこはうが云事をうけなんじが
むほん誠らしきはおよしを燕王のかくしよりをはぶ
さにすきまあらばいかやうのよしなきさくらりも
わろに海ことおもひぞあれ海ことをしなりけり
なんぞれをいつわりふまなんじを幕府の校尉
とさせるはいかなる十日をもたゞずはりし御かに燕王と
こやうをもおもまで数千里のありもいでう
かんじ校尉のきらん不るそ事をはこへきり
おこさぞやよくくられなあんたりになんじをさが
よかとさんとのもりこはかえうりとおはせ

まことにそあとりかりものとて昭帝の御としはやい
まだ十四歳の事なれどたゞ幼にちんおりたる人にて
此よしをきくよりも君の御理をかんじいりくあけひ
小目とめを見あらはせてさしをかいてうちやぶり
又かの燕王よりもはつりひよ後いりあるとかをし
これこのよしなきさくよりもおもひ誤さあらはてくあげ
さりぬ又大将軍桀が一ぞく霍光をそしりあふあれど
昭帝いかうせ給ひて仰せまうす人霍光は忠臣の
その我か父武帝ゆびかうがあいとけするによりて
よろしく霍光をたのませ給ひてこはうがたすけ給へ
しめしまゐらせふよりして以後霍光をそちらこの

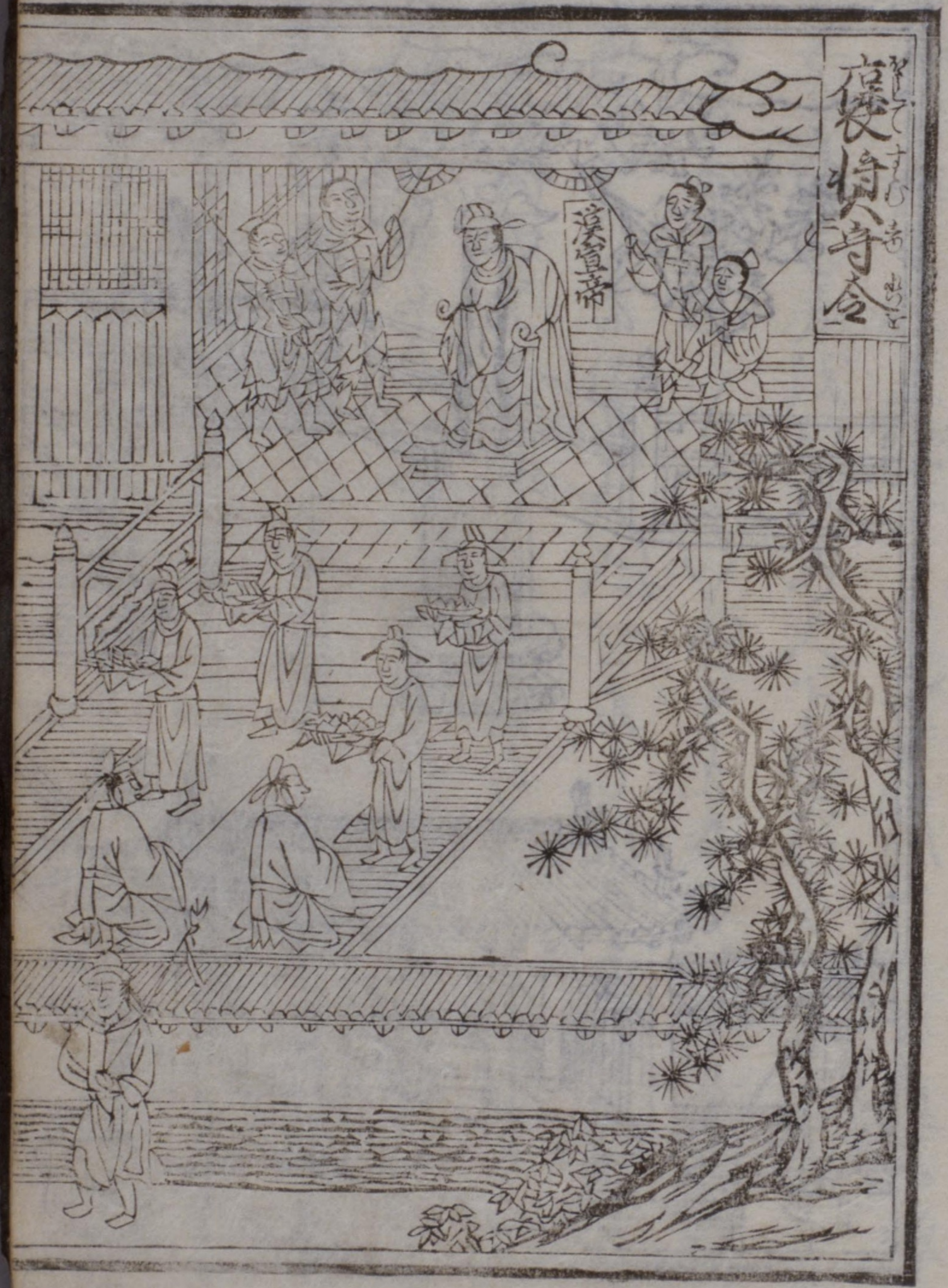
けうこうあらばぢうざいにおこなふべしとのたまひ
しかれば御門の仰せをおそれて二たびかかる者も
なし霍光君は御おんをかんじていよいよちうせつ
をはげむ事少もおろそかなかりしとかや

褒奨守令

漢の宣帝は卑しくして民間に人となりしがよく官人を
しろしめしてあしくゑらびみをなどうし給ふ又府
中の太守郡縣乃太守なうやまひ用ひて使せらる
みなそれ府中郡縣の太守ところをのへなるゝ百姓乃
みなところなり能く是をひさしく太守人はその所
ふたらせしてよびくかゆるさのむすらバありふに
されなそ百姓太守乃ゑぐみをうふむらぞしては
まつ河内へちかづる郡吏太守なりたなまさく又ある
たりし太守をむうへなぞさぶめてうつ係の俸禄ん
ぜろひまずうじ忠よせんなぐるふよりしてそ

なびく太守をあらたむることなくしてひさしかりの
あひだなれば百姓たがひにあんどのおもひをえて太守
のめぐみをかうむりまつりごとにふくしたがひして
かくれなくなりしかばかつふくしとちかりしゆゑこそ
おこりなれ故に宣帝乃時も府縣の太守をえらみ
その二千石のほうさづけてひさしくその地にをさめ
おほせて府縣の太守としていふぞれどもなさざり
しにしんちうをおそれやまずありければ刑ちよくじやう
をくだし給ひてめしまで官にあげ給ひあるひは金
銀絹帛なとたまひてよろこばされあるひは関内侯乃官に
なされ又は三公の官九卿乃くらゐにいたりしもあまたなり

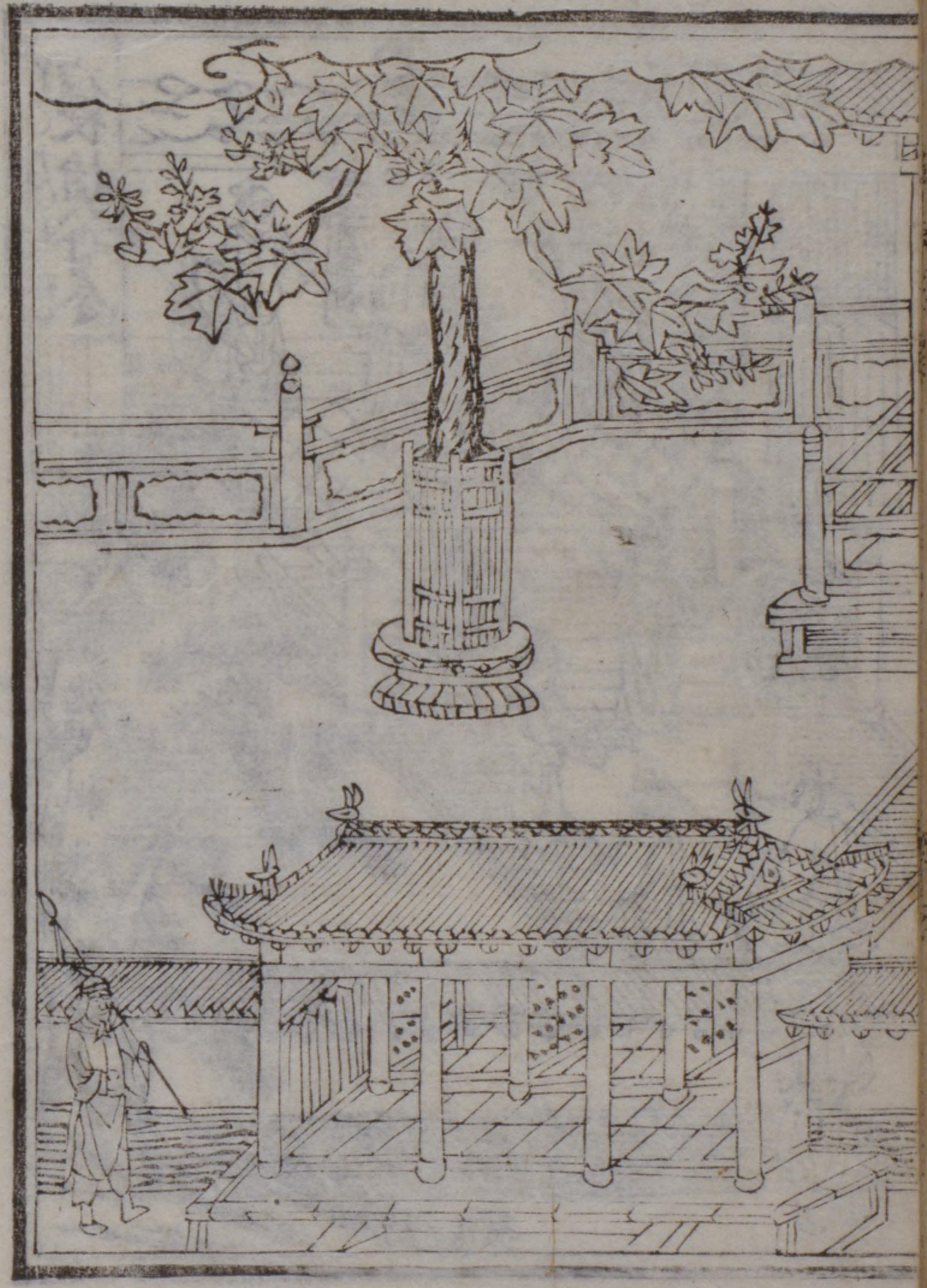
なかにて官をすゝめ給へり黄霸といひし者潁川乃
太守たりしかどもめされて太子の太傅となり又
趙廣漢といひし者も潁川の太守たりけれ共後には
京兆乃尹にをさめられくにをしづめて名たかく官
にすゝめたまへり故に天下太平におさまり中興乃
明君なる事後世におよぶとぞ傳にありける



帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-033
国立国会図書館

詔儒講経

漢の宣帝は孫りぐくとんをおのまなひてあまた
の儒者をめされ五経をとりまぜ論じさせられ又経よ
とくと読て義理おさめ天下をおさむる乃ぐう里
あさきりあり古より聖いあども秦の始皇帝人のい
ましめよそむきて儒者の道をうしなひあまねく天下乃
書物をあつめてことごとく火をかけてやきすてたまふに
今漢の代よりてうりいましへより乃書物を渕集しくふ
あげ給いぶをといろどもひさしきなら（ゑ）へぬまで
天下にあかさ儒者あちもその傳授まちくふして
あげひふ其の理あらしうるぞ故よ物かくれ儒者を



あつめ學者して五經乃ぎろんをさせらるゝ所
ぎやうせんぎひようろんして傳註をなし
かうざうをそれ〴〵のくわん給兄あはせてよく
ぎりをさだめらる又蕭望之と申者にしやうに仰せ
たかるいたづひよいぞあむひようろんしてぜひの
はかけうところなきされハりくよきされたう所う
かよきうりとそうりん學とありしがそうけたまハ
ちうきてぜひのけがの所あれどもゆへそうもん
やまり宣帝さうし出されてよくそのぎんあくなき
まけ學へりちかはちの五經のうち易經と梁丘賀
はさうか所尚書と夏侯勝夏侯建が説をうけとこ學

春秋ハ穀梁派がはさうなとく學これらをてがんと
なされけり易經尚書春秋のちの三經ハかつあらる
まち博士の官をたてあまねく此三經をしへ
學者のかりかなりしどなくてんかふひろく傳まり
されて又詩經禮記乃二經とをどめしまへよりひよう
ろんしてさだめおさしる所あまでひらし又たうに
あるためぞ漢の宣帝よりこのかた五經の義理あきら
らか所なり學ことの日月中の天乃おどろしれなき萬
世にはうへて天下をおさむる人の法度ともなるべき所
その功又おほひなるかな

帝鑑圖説巻第三終

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-036
国立国会図書館

国立国会図書館

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-037

国立国会図書館

帝鑑図説　8冊　WA7-237　03-038
国立国会図書館